

*Great Expectations*におけるふたつのエンディングの意義

小野 章

1861年7月1日付けの John Forster への手紙の中で Dickens は *Great Expectations* の結末部分を書き換えたことに触れている。

You will be surprised to hear that I have changed the end of “Great Expectations” from and after Pip’s return to Joe’s, and finding his little likeness there.

Bulwer (who has been, as I think I told you, extraordinarily taken by the book) so strongly urged it upon me, after reading the proofs, and supported his views with such good reasons, that I resolved to make the change.¹

この中に言及されている“such good reasons”が一体何であったのかを詮索することは無意味であろう。というのも、結局のところ、それは知る由もないからである。大切なのは、Richard J. Dunn も指摘するように、結末部分を書き換えた理由ではなくて、書き換えが作品全体に及ぼす効果の方であろう²。その効果には *Great Expectations* のみならず Dickens 芸術を理解する上で重要な手がかりとなるものが隠されていると私は考える。

Great Expectations の結末部分をめぐる数多くの意見は四つに大別される。まず初めに、書き換える前の結末部分の方が良いとする意見³。これに対し、書き換え後の方をより評価する批評家も存在する⁴。第三の意見としては、書き換え前、書き換え後の別を問

¹ Mamie Dickens and Georgina Hogarth, eds., *The Letters of Charles Dickens* (London: Macmillan, 1893) 521.

² 詳しくは Richard J. Dunn, “Far, Far Better Thing: Dickens’ Later Endings,” *Dickens Studies Annual* 7 (1978): 232 を参照されたい。

³ 例えば、John Forster は“the first ending nevertheless seems to be more consistent with the drift, as well as natural working out, of the tale, and for this reason it is preserved in a note”と述べている。John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol. 3 (London: Chapman and Hall, 1874) 336.

⁴ 例えば、Monroe Engel は次のように書き換え後の結末部分の評価している。“It is reasonable then to suggest that Pip has reentered the ruined Eden in order to leave again, as Adam had left, chastened and with his chastened Eve....” Monroe Engel, *The*

わず、結末部分を待たずして小説は既に終わっているのだとするものが挙げられよう⁵。第四の意見は George Bernard Shaw に代表されるもので、Shaw はふたつの結末部分のいずれにも満足せず、自ら「新しい」結末部分を提示してる⁶。しかし、Dickens による結末部分の書き換えが厳然たる事実である以上、我々に出来ることは書き換え後の結末部分を「正當な」ものとして受けとめ、その意義を検討することであろう。

書き換えられた後の結末部分が作品全体に及ぼしている効果について考察する前に、書き換えられる前の結末部分について議論しておくことは決して無意味ではない。むしろ、これらふたつの結末部分を比較検討することは書き換え後の結末部分のより深い理解につながると考えられる。なお、便宜上、以降の議論では書き換え前の結末部分を第1のエンディング、書き換え後のものを第2のエンディングと呼ぶことにする。

第1のエンディングを評価する意見にある程度共通しているのは、脚注の3に引用した John Forster の見解にもあるように、第1のエンディングの方が小説全体の悲しい色調によく合致するという点である。なぜ第1のエンディングは「悲しい」雰囲気を持つのか。それは、このエンディングでは Pip と Estella の結婚の可能性がはっきりと否定されているからである。次は第1のエンディングからの引用である。

I [Pip] had heard of the death of [Estella's] husband (from an accident consequent on ill-treating a horse), and of her being married again to a Shropshire doctor, who, against his interest, had once very manfully interposed, on an occasion when he was in professional attendance on Mr. Drummle, and had witnessed some outrageous treatment of her.(461)⁷

Maturity of Dickens (MA: Harvard University Press, 1959) 167-8.

⁵ 例えば、Martin Meisel は“That scene, [Pip's] return to Joe's and the finding of little Pip, remains practically unchanged, and it is the true ending of *Great Expectations*.”と述べている。Martin Meisel, “The Ending of *Great Expectations*,” *Essays in Criticism* 15 (1965): 327.

⁶ Shaw は“Dickens wrote two endings, and made a mess of both.”と批判した上で、“So far the new ending was in every way better than the first one.”と条件付きで書き換え後の結末部分の評価している。但し、この結末部分も“Since that parting I have been able to think of her without the old unhappiness; but I have never tried to see her again, and I know I never shall”という一文で結ぶべきだと提言しているのである。Dan H. Laurence and Martin Quinn, eds., *Shaw on Dickens* (New York: Frederick Ungar, 1985) 55, 56.

⁷ テキストは The Oxford Illustrated Dickens 中の *Great Expectations* (Oxford: Oxford

暴君 Drummle の死後 Estella は既に再婚しているのである。しかも、上の引用から判断する限り、再婚相手である Shropshire 州の医者は Estella にとって思いやり深い夫であろう。今度こそ彼女は幸せな生活を送っていることが予想される。換言すれば、彼女と Pip が結ばれる可能性は無きに等しい。この意味で第 1 のエンディングは確かに悲しい雰囲気醸している。しかし私は作品全体の色調にも、またエンディングのそれにも関心を払うつもりはない。第 1 のエンディングについて強調すべき点は、むしろ、その意味せんとするところにおいて曖昧ではないということである。つまり Pip と Estella のさらなる恋物語の可能性は否定されているのである。

一方、第 2 のエンディングは多義的な解釈を可能にしてくれる。まずはじめに、Drummle の死後 Estella が再婚したかどうか定かではない。本文にはこうある。“...for anything I [Pip] knew, she was married again”(458). この表現がいかに心許ないものであるかは、第 1 のエンディングにおける“I had heard of...her being married again to a Shropshire doctor...”という表現と比較すれば明白であろう。つまり第 2 のエンディングでは、Estella の再婚相手が誰であるかはもとより、彼女が再婚したともしていないともはっきりとは書かれていないのである。ここで既に解釈が曖昧にならざるを得ない。

もし仮に Estella が再婚していないとして、どのような解釈が可能であるか。ここで第 2 のエンディングの最終段落を引用したい。

I took her hand in mine, and we went out of the ruined place; and, as the morning mists had risen long ago when I first left the forge, so, the evening mists were rising now, and in all the broad expanse of tranquil light they showed to me, I saw no shadow of another parting from her.(460)

一度は別れた男女がかつての思い出の場所を手にとり取って後にするという上の描写を見る限り、近い将来におけるふたりの結婚が示唆されていると考えられるかもしれない⁸。しかし第 2 のエンディングの解釈はそれほど単純なものではないというのが私の考えである。第一、和解した Pip と Estella は結婚しないまま仲の良い友人同士でいても良いわけである。上に引用した最終段落の直前に Pip と Estella の間に次のような会話が交わされていることから、ふたりが夫婦ではなく友人になるという可能性は否定できない。“‘We are friends,’ said I, rising and bending over her, as she rose from the bench. ‘And will

University Press, 1953)を使用。引用文に続けて、括弧の中に頁数を示す。

⁸ 例えば、George Bernard Shaw も次のように書いている。“Unfortunately, what Bulwer wanted was what is called a happy ending, presenting Pip and Estella as reunited lovers who were going to marry and live happily ever after....” Laurence and Quinn 56.

continue friends apart,' said Estella”(460). ふたりが友人になるという解釈以外にもいくつかの解釈が第2のエンディングに関して成り立ち得る。以下に見る4通りの解釈の鍵は、上に引用した第2のエンディングの最終段落の最後の部分(“I saw no shadow of another parting from her”)にある。とりわけ、“another parting”という表現に着目したい。*The Oxford English Dictionary*によると、“another”の定義は“One more, one further; originally a second of two things; subsequently extended to anything additional or remaining beyond those already considered; an additional.”⁹となっている。この定義からすれば、“another parting”にはそれに先行すべき“one parting”もしくは“partings”が存在するはずである。それ(ら)が一体何を指しているかによって“another parting”の解釈のみならず第2のエンディングの解釈全体が大きく左右される。

(1) 第2のエンディングの最初の解釈は、“another parting”に先行する“one parting”がPipもしくはEstellaの死による別れを指すことを前提としている。この場合、“I saw no shadow of another parting from her”という表現は次のように日本語に訳されよう。「僕はエステラとの別離の陰を、死による別れ以外には何も見なかったのである。」これは我々に英国国教会における結婚式の誓いのことばを彷彿とさせる。その誓いのことばは以下のとおり。

I take thee to my wedded husband, to have and to hold from this day forward, for better for worse, for richer for poorer, in sickness and in health, to love, cherish, and to obey, till death us do part, according to God's holy ordinance; and thereto I give thee my troth.¹⁰

このように英国国教会の結婚式では、死別するまで愛し合うことを、すなわち死のみが夫婦の仲を裂くものであることを誓うわけである。従って、「僕はエステラとの別離の陰を、死による別れ以外には何も見なかったのである」という表現は、PipとEstellaの来るべき結婚を強く示していると考えられる。

(2) 第2のエンディングにおいて、先に引用した最終段落の直前にPipはEstellaに次のように語っている。“To me parting is a painful thing. To me, the remembrance of our last parting has been ever mournful and painful”(460). この中にある“our last parting”が小説第44章に描かれているPipとEstellaの別れを指していることは間違いない。第2のエンディングの2番目の解釈は、“another parting”に先行する“one parting”がこの第44章の別れを指すことを前提とする。第44章におけるふたりの別れの場はMiss

⁹ *The Oxford English Dictionary*, vol.1 (Oxford: Oxford University Press, 1933) 348.

¹⁰ 『英国国教会祈禱書』より。なお、本文に引用したものは新婦の新郎に対する誓いのことばであり、新郎の新婦に対するそれとは若干異なる。

Havisham の屋敷、サティス荘であった。しかし第2のエンディングにおいてサティス荘は既に廃虚と化している。今は崩れ去ったかつての別れの場所を Pip と Estella は手に手を取って後にする。そのふたりの間に「さらなる別離の陰が見えなかった」ということは、ふたりの来るべき結婚がやはり示唆されていると解釈するのが妥当であろう。この場合、先に触れたように、ふたりが夫婦ではなく友人になるという可能性もある。

(3) 第3の解釈はこれまでの解釈と比べて悲観的である。第2の解釈の際に見た小説第4章における別れでは、いわば一方的に Estella が Pip を振ったわけである。一方的に振られた Pip にはやはり未練が残ったことであろう。第2のエンディングにおいて Bidy に Estella のことを聞かれた Pip が示す反応にもそのことが窺い知れる。

“Tell me as an old friend. Have you quite forgotten her?”

“My dear Bidy, I have forgotten nothing in my life that ever had a foremost place there, and little that ever had any place there. But that poor dream, as I once used to call it, has all gone by, Bidy, all gone by!”

Nevertheless, I knew while I said those words, that I secretly intended to revisit the site of the old house that evening, alone, for her sake. Yes, even so. For Estella’s sake.(457-8)

過去は文字どおり一切過ぎ去ったことだと口にしながら、やはり Pip には Estella のことが忘れられないのである。そして再び訪れたサティス荘で奇しくも彼は彼女と再会する。そこで Estella は過去を悔いていることを告白し、Pip に許しを求める。それに対し Pip も応える。この時初めてふたりは心から理解し合えたと言って良いであろう。そしてここに至ってやっと Pip は本当の意味で Estella と別れることが出来るのではあるまいか。つまり、以前は一方的に振られた故に、別れたつもりでも未練が残っていたのに対し、互いに理解し合った今こそ「本当に」別れる決心がつくと解釈するのである。そしてこの真の意味での別れを“another parting”に先行する“one parting”が指すのであれば、“I saw no shadow of another parting from her”という表現はふたりがもう二度と会わないということの意味するのではないだろうか。なぜなら二度と会わなければ必然的に再び別れることもないからである。

(4) これまで見たきた3通りの解釈では“another parting”に先行する別れがひとつであることを前提としてきた。しかし、先に引用した *The Oxford English Dictionary* の“another”の定義にあるように、“another parting”には複数の「別れ」が先行し得るのである。深刻な意味で Pip と Estella が何度も別れてきたとは考えられない。しかし「別れ」がいつも深刻なものであるとは限らない。つまり、我々が気軽な意味で日常的に人と会っては別れるように、Pip と Estella も初めてサティス荘で会って以来、何度となく会っては別れてきたのである。そして、“another parting”に先行する“partings”をこのような日常茶

飯事的な「別れ」ととらえると、第2のエンディングの最後の表現 (“I saw no shadow of another parting from her”)はどのように解釈できるのでしょうか。第3の解釈と同じく、やはりふたりはもう二度と会わないということになるろう。なぜなら、金輪際会わなければ、これ以上別れの挨拶を交わすこともなくなるからである。

以上、“another parting”に先行する“one parting”もしくは“partings”が何であるかによって第2のエンディングの意味せんとするところが変化することを検討してきた。さらに、彼らがこの先結婚すると仮定した上で、どのような読みが可能なのかを提示してみたい。小説第19章の最終段落を引用しよう。

We changed again, and yet again, and it was now too late and too far to go back, and I went on. And the mists had all solemnly risen now, and the world lay spread before me.(152)

これは、Joeのもとを離れてロンドンに向かう Pip の様を描いたものである。この時 Pip は花の都で立派な紳士になるという野望を胸に抱いていた。しかし、その野望が叶えられなかったことは後に見るとおりである。上の引用の中で特に「霧」の描写に注目したい。ロンドンで挫折が Pip を待ち受けていたことを合わせ考えれば、霧には不吉なイメージが付与されていると言えよう。興味深いことに、先に引用した第2のエンディングの最終段落にも霧の描写が見られる。もう一度引用しよう。“...as the morning mists had risen long ago when I first left the forge, so, the evening mists were rising now....” この中の“the morning mists”が第19章の最終段落に言及されている霧を指していることは言うまでもない。第19章における霧が朝のものであるのに対し、第2のエンディングにおける霧は夕刻のものであるということ、また両者にはその状態においても違い (“had risen”と“were rising”の違い)があるということ、このような違いこそあれ、霧の似たような描写は我々に不吉な予感をさせるに十分である。つまり、第19章においてロンドンに向かって行った Pip の期待がはずれてしまったように、Estella との結婚生活に対する Pip の期待もやはり裏切られるのではないかと危惧してしまうのである。霧の描写に併せてさらに、第2のエンディングの最終段落に使われている意味上否定的な表現 (“shadow”と“parting”)も Pip と Estella の将来に暗雲を投げかけているような気がする。

ヴィクトリア朝の小説にとって作品内の有機的統一の保持が非常に重要であったことは、J. Hillis Miller の次のことばからも窺い知れる。

A Victorian novel is, finally, a structure in which the elements (characters, scenes, images) are not detachable pieces, each with a given nature and

meaning, each adding its part to the meaning of the whole. Every element draws its meaning from the others, so that the novel must be described as a self-generating and self-sustaining system....¹¹

Dickens も自身の作品に有機的統一が保たれているかどうかを神経質に気にしていたようである。それを裏付けるものとして、Kate Flint の次の意見を引用したい。“In the case of many of his earlier novels, most frequently in his appended prefaces, Dickens had tried to cover himself against such criticism by claiming that each work had a particular focus.”¹² しかしながら、実際のところ Dickens の初期の作品において有機的統一が保たれているとは言いがたい。しかし *Dombey and Son* 以降、彼の作品は有機的統一の保持と言う点において著しい進歩を見せるようになる¹³。そして晩年に書かれた *Great Expectations* は、Angus Wilson の表現を借りれば、“the most completely unified work of art that Dickens ever produced”¹⁴ たり得ている。しかし、*Great Expectation* は果たして本当に有機的統一を保持し得ているのだろうか。

上に引用した Miller のことばにもあるように、有機的統一を持つ作品では、その構成要素の全てが有機的に関係し合っひとつの世界が築かれていると言えよう。換言すれば、その世界とは相容れない要素は排除されるのである。つまり、有機的統一を持つ作品は閉じられた空間を形成していると思われ得る。*Great Expectations* の第 1 のエンディングについて私は、それが「その意味せんとするところにおいて曖昧ではない」と述べた。意味的に曖昧ではないためにこのエンディングは *Great Expectations* の有機的統一性を高めるのに一役買っていると言えよう。なぜなら、逆に言うと、意味的な曖昧性、ぼつれは高い有機的統一性を誇る作品の閉じられた空間には収まりきらないものだからである¹⁵。

¹¹ J. Hillis Miller, *The Form of Victorian Fiction* (OH: Arete, 1968) 30.

¹² ここにある“such criticism”は *Bleak House* に有機的統一が見られないという George Brimley の意見を指す。詳しくは Kate Flint, *Dickens* (Gr. Brit.: Harvester, 1986) 59 を参照されたい。

¹³ Edgar Johnson も次のような見解を示している。“...*Dombey* is the first masterpiece of Dickens's maturity.... The problem of building a united plot around a central theme so imperfectly tackled in *Chuzzlewit* is triumphantly solved in *Dombey*. None of Dickens's later books exhibit the loose improvisation with which he had begun....” Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, vol.2 (London: Hamish Hamilton, 1952) 643.

¹⁴ Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: The Book Society, 1970) 269.

¹⁵ 言語によって構成されている以上、第 1 のエンディングにせよ、やはり多義的な解釈は可能なはずである。しかし、第 2 のエンディングとの比較において私は、第 1 のエンディ

第2のエンディングはその意味せんとするところが曖昧である。まず、Estellaが再婚したか否かが明らかにされていない。また第1のエンディングには見られない「霧」が、第2のエンディングでは意味あり気に登場する。さらに“another”という語によって、PipとEstellaのこれからの関係もぼかされているのである。この“another”という表現が使われているのは興味深い。なぜならこの表現こそ言語の本質を示すものだからである。先に見たように、単語“another”には必ずそれに先行するものが付随する。つまりこの単語はそれ独自で存在することはない。そして、「それ独自で存在することはない」ということこそ言語の本質を言い表したものである。なぜなら、今さら繰り返すまでもなかるうが、言語は関係の体系によって構成されているからである。

言語の体系は決して静的なものではなく常に動的である。(言語の体系は閉じられたものではない。)換言すれば、あることばの意味は他のことばによって限定されつつ、しかも常にその意味は流動的に変化する可能性を秘めているのである。そして小説 *Great Expectations* の第2のエンディングはこのことを我々に意識させてくれる。それは何よりも、このエンディングの持つ曖昧性が有機的統一とは根本的に相容れないことに表されている。意味的に曖昧なこのエンディングは常に新しい読みの可能性を秘め、故に閉じられた空間にはとても収まり切るものではない。そしてこれこそが、第2のエンディングの作品全体に及ぼす効果である。この小説が書かれたヴィクトリア朝において、優れた小説の第一条件が作品内の有機的統一であったことは上で見たとおりである。そして *Great Expectations* は優れた有機的統一性を誇ると一般に言われている。しかし第2のエンディングはその有機的統一性を裏切っている。逆に言うと、第2のエンディングによってこの小説は、ヴィクトリア朝の文学規範を超える作品となっているのである¹⁶。

ングがはるかにより曖昧ではないという点を強調したい。

¹⁶ 言語の本質を示すために Dickens が *Great Expectations* の結末部分を書き換えたとは主張しているのではない。前述のとおり、私としては書き換えの理由に関心を払うつもりはないのである。重要なのは、作家が意識したにせよ、そうではなかったにせよ、第2のエンディングがその意味せんとするところにおいて曖昧であり、故に言語の本質により迫るものとなっていることである。